



第1部 信楽の地質—陶土のヒストリー



陶土はカオリンや石英や長石を含む
信楽地域の地質：中生代白亜紀の花崗岩の上に、古琵琶湖層群が分布



花崗岩の風化のしかたもわくわく説明しています



多賀町立博物館の近くの焼きもので有名なものは湖東焼です。また、アケボノゾウが発掘された多賀町四手の蒲生層の「土」は陶土としては使いにくいそうですが、これをがんばって焼いた作品も見られます（必見!!）。



掘られた「土」が陶土になるまでの作業を製土といいます。製土のいろいろ。そのうちの「水簾（すいひ）」のモデル実験も展示しています。

第2部 焼成の科学—発色の秘密



ここでは陶土が焼きものになるまで：焼成（しょうせい）の説明です。焼成には酸化と還元が関係します。土に含まれる成分による発色を考えてみましょう。



企画展 地質と信楽焼

令和2年(2020年)9月12日(土)～11月8日(日)

滋賀県立陶芸の森、甲賀市水口歴史民俗資料館、甲賀市土山歴史民俗資料館、多賀町立博物館
「信楽焼くわび・さび」の美の秘密とヒストリー（助成 一般財団法人 地域創造）
の連携展示の一環の企画展です



古琵琶湖の移動と地層のなまえ：約400万年前から約180万年前



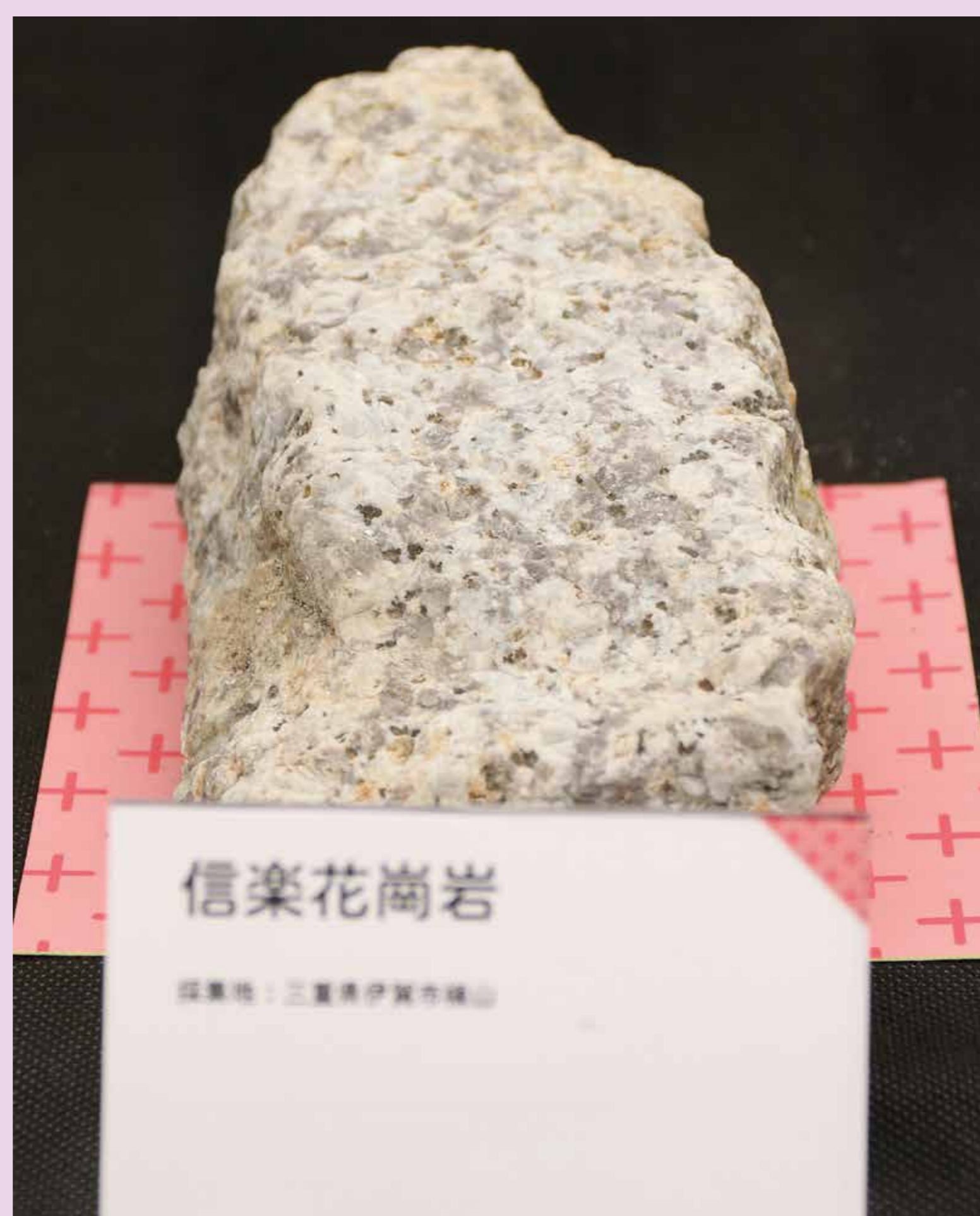
古琵琶湖の各時代の粘土質の堆積物にいろいろな化石が含まれる



中生代白亜紀に地下深くにマグマが貫入してきた花崗岩の分布



信楽付近で風化した花崗岩のつぶが堆積した古琵琶湖層群分布



白亜紀の花崗岩のうち信楽花崗岩（実物標本が展示）
大きなつぶは石英や長石で、風化してこまかい砂のようになりやすい

柱の地層の説明のほか 深さ20m～25mの部分は 実物のボーリング・コアが展示されました

炭化木の木片
（亜炭の層）



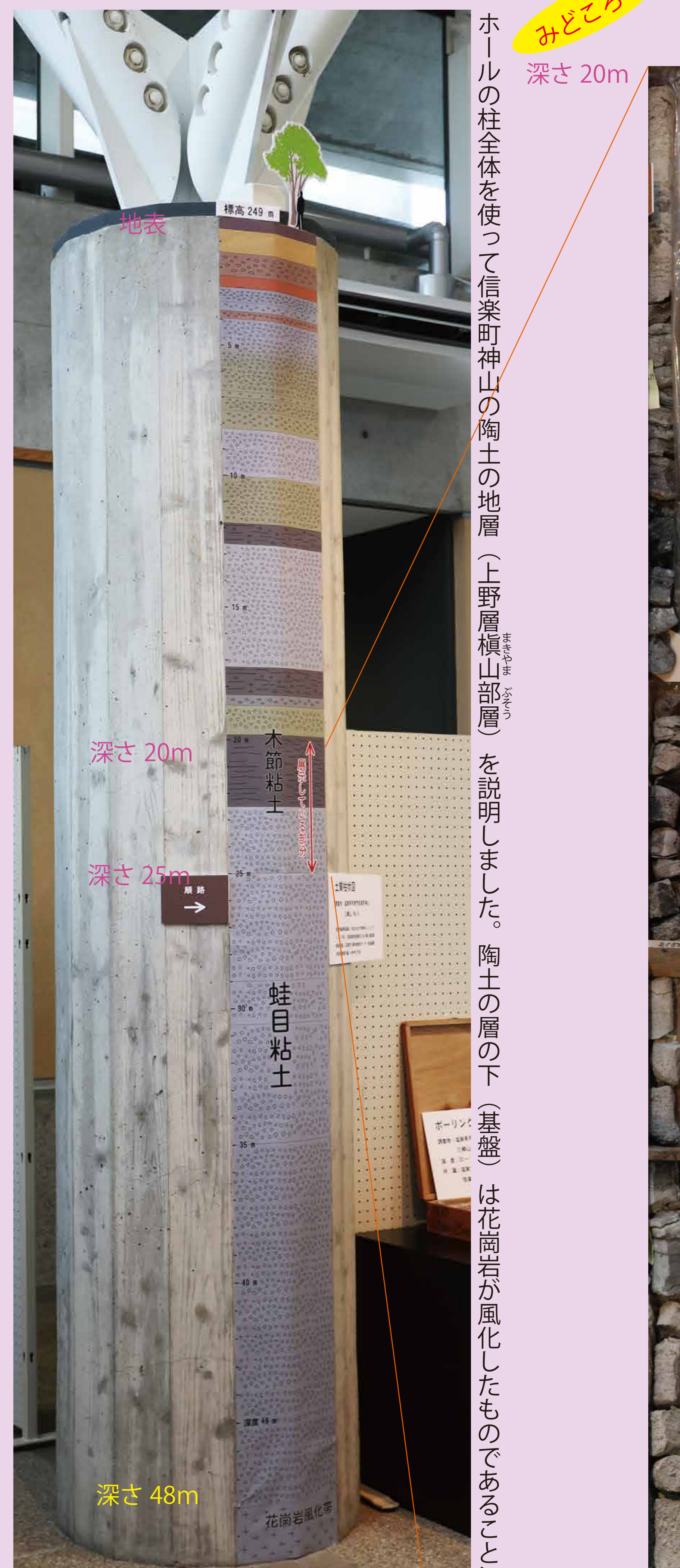
展示してある三郷山鉾山（信楽町神山）の陶土層 地下のボーリングで穴を掘ってコア（地層の円柱）を掘り上げたもの。箱に入ったコアの写真を深さにあわせてつないだら右のように地層の柱になります。

きぶし
木節粘土

品質のいい陶土層
カオリン質の粘土で、木の炭化したものを含み有機質なので茶色っぽい（褐色～暗褐色）

がいろめ
蛙目粘土

品質のいい陶土層
白っぽいカオリン質の粘土で、ぬれたら石英のつぶがガエル目のように光る



みどころ
深さ20m

深さ20m

深さ25m

深さ48m

木節粘土

炭化木

蛙目粘土

深さ25m